伊豆の踊子の自然描写について

山本壽夫

一

国文学科など文科の学科をもたない女子短期大学で一般教養の文学の講読―それは十五時間程度のものであるが―の教材を近代小説ときめて、さて適当なものを選択しようとすると、次のやうなことに当面するであらう。第一に作品も作者も高校生にも周知のものであつて欲しい、出来れば高等学校の国語や社会の教科書にその片鱗をのぞかせてゐたお馴染のものであればなほ結構。それにその作品が作者にとつても亦文学史上においても重要なものでなくては勿論困る。第二に作品の内容は試験勉強にあけくれて高校を出てきた十九、二十の娘さんにも理解できる、いや相応はしいものでなくては駄目だし、理解出来たつて彼女等の関心と興味を十五時間も保ち続けられるやうなものでなくては、当方の一人相撲といふ滑稽を演ずる恐れなしとしない。第三には多少の手加減を加へれば十五時間で読み切れるかどうか、これも重大である。時間が余り手持無沙汰なのも恰好がつかないし、尻切れとんぼではなほさら困る。かう考へてみると適当だといつてその選にあたるものはさうざらにあるものではないことに気がつくのである。川端康成の「伊豆の踊子」などはこの数少いものの一つと言つてよからう。

二

「掌の小説」や「伊豆の踊子」系列の一連の作品、それに接続する所謂「浅草もの」の終末期をなし、「夕景色の鏡」「白い朝の鏡」を発表して「雪国」時代に入つて行く、その過渡の心情を物語る「抒情歌」や「禽獣」も既に成つてゐる昭和九年は康成にとつては一つの重要な転期をなしてゐる。この時期になつた「文学的自叙伝」は康成前期を自ら総括して筆もおのずから心熱の燃え上りを示してゐるとして高田瑞穂氏(註)は、この文学的自叙伝に「子供もなく、守銭奴にもなれず、名声の空しさも見える私は、恋心が何よりも命の網である。しかし恋愛的な意味では、いまだに女の手を握つたこともないやうな気がする。嘘をつくなと言う女の人もあるかもしれない。しかし、これは単なる比喩ではないやうな気がする。ところが手も握らぬのは、女に止らないのではあるまいか人生も私にとつて、さうなのではあるまいか。現実もさうなのではあるまいか。私は哀れな幸福人であるか。」とあるのに着目して、この康成が自らを語つたことば以上には何人も康成を語ることは難しいとして、康成のこのことばを思ふ時すべての康成論は生色を失うことを余儀なくされずにはゐないといふのである。でこの「恋心が命の網」であることを確認して「恋心」は恋ではないこと、そしてこの微妙な立脚地の康成における確立時期を「伊豆の踊子」前後と見るのである。そして『十四歳の踊子の「いい人ね。」「いい人はいいね。」と言ふ無邪気な声が、孤児根性に悩む二十歳の康成を打つた時、康成は「純粋の声」の美しさ、「純粋の精神」のありがたさに、ことごとく魅惑されたのであつた。この時しがない伊豆の踊子は、康成にとつて至上の美神と化し、その美を讃へることはやがて康成の存在理由となつた。』といひ、又『「伊豆の踊子」の映画化に際して『中の夫婦の悪い病の腫物に関する文を指摘して『間接にでも自己の信じた美神を傷つけることが、康成にとつてはいはば死活の問題にかかはるものであることを知るべきである。同時に「伊豆の踊子」の成功が、右の確信を有力に支へてゐたことも疑へない。』とい

ひ、既に「禽獣」「抒情歌」を書き終へた康成にとつて十分満足すべきことではなかつたにも不拘、昭和十年以降「雪国」によつて康成の名が新しい世評を集めるに至るまでの約十年間は、康成は「伊豆の踊子」の作者であつたのであり、康成自身も事情の許す限り彼の数々の作品集にこの作品を収めることを忘れなかつたのは、世の人が我が幼き美神をわれとともに愛することを知つたからであるとし、『「伊豆の踊子」から「女であること」にいたるまで、康成は終始己が美神に忠実であつたことは一番大切なことであり、又伊豆の踊子は作家康成の成熟と歩調を合はせて、次第に自らをも成熟させていつた。しかし康成にとつて美神の本質はあくまで不変でなければならなかつた。十四歳の踊子は、やがて「抒情歌」の神童竜枝となり、「禽獣」の千花子や禽獣たちに転生し、やがて「雪国」の駒子となり、「千羽鶴」の太田夫人となる。』といふのである。以上のやうな「伊豆の踊子」に対する所論は最大公約数的なものとして誰しもが一応承認しなければならぬであらう。そして又プロレタリヤ文学と対決しつつ昭和初期の文壇を鮮かに彩る二つの大きな文学潮流をなしたのが新感覚派文学であり、その文芸思潮は主として横光と川端によつて形成されたことを思へば「伊豆の踊子」は教材として重要な第一の条件を満足してゐるといふものである。

さてこれを教材として使用するとなると、色々となすべきことがあるであらうが、今ここではその一班として構成の一部特に背景としての自然描写について、その具体的な説明を如何に纏めるかといふ点について一例を述べてみたいのである。然しその前にこの「伊豆の踊子」の自然描写については注意すべき点があるのである。即ち次の瀬沼茂樹氏の意見に代表されるやうな見方である。

かくて「伊豆の踊子」は誰しもいうように、ひとつの青春文学であるが、その川端文学にとつての意義は、十四歳の踊子との邂逅によつて、むしろこの踊子に導かれて、自己自身に還つたと自覚したことである。だから踊子と共にする伊豆の旅は、現実的な姿を没して、一種の心象風景に純化され、「修善寺から下田までの沿道の風景がほとんど描けてゐない」のはきわめて当然であつた。そこでは、初めから踊子たちの純情が問題であつたのだから、その現実の姿から疎隔したように、(『伊豆の踊子の映画化に際して』末段参照)伊豆の現実の風景からも疎隔されなければならないものであつた。伊豆の自然はどこまでも「心象」のなかにある自然であり、「純情」による疎隔化によつて、自然をもまた人をも、詩化しているのである。作者自身である「私」は「孤児」であることによつて、この世界にもたらされるとともに、その感情から解放されて、同じ風景のなかに疎隔されてそこの住人として位置するのであり、そこに「還帰」は一種の精神の浄化としての働きをもつている。かくてこの小説にいう「旅情」はこういう働きにおいて成立している「純情」の象徴に他ならないであろう。

所詮「伊豆の踊子」における自然描写は踊子等が現実から疎隔され美化がおこなはれたやうにあくまで美化され純化され象徴化されて、現実的な姿を失つた一種の心象風景に純化されてゐるのであつて、その意味では現実的な伊豆の風景などは描いてないといふのである。これは長谷川泉氏もいふやうに旅空を創作の場とし、具象に執することを排し、抽象された美と心理の世界に遊ぶのが川端の作風の基本構造であり、少年時の実録的な日記といふ特性を担う「十六歳の日記」は例外でむしろ川端文学の基本構造はこちらにあり、この出世作「伊豆の踊子」はこの点においても川端文学の系譜の基本構造をよく具現してゐると認めなければなるまい。で長谷川氏の

雪国の風景にさかれた描写が比較的多い「雪国」や、京都の古い街やその行事に克明な描写を与えたかに見える「古都」や、鎌倉の

雰囲気を描き出すことで作品の質を高めた「山の音」にしても、川端作品の非現実的な性格は否定し得ない。風景を描いても、川端文学の神髄は、人の心理を抽象するよすがとして生かしているにすぎない。その意味において、川端文学は心理主義の文学である。「眠れる美女」や「片腕」がその典型である。「伊豆の踊子」が一見温泉地伊豆の抒情的な美しい風物詩のように見えながら、実は伊豆の風景が描かれていない心理主義文学であることの理由はそこにある。

といふ説もこれと同様の趣旨の主張と踏まへておいて、川端自身の「伊豆の踊子」への自評を見よう。三島由紀夫編「文芸読本川端康成」のなかの座談会「川端康成氏に聞く」のなかで語つてゐるものである。

川端　「伊豆の踊子」は、うまく書こうというような野心もなく、書いていますね。文章のちょっと意味不明なところもありますし、第一景色がちっとも書けていない。

三島　そうお思いになりますか。

川端　ええ。あれはあとでもう少しきれいに書いて、書き直そうと思ったけれども、もうできないんですよ。割合教科書に載っているでしょう、そうすると意味不明なところがあるらしいのです（笑）それを学生が教師に聞いても、教師は答えられないですものね。沿道の伊豆の風光を学生が僕のところに聞いてくるのが、いまでもときどきありますよ。だから、文章は不注意に書いているところがかなりあるのですね。

三島　それがまた川端さんご自身に、その作品を美しく見せているのではありませんか。

（註）五　「南伊豆行」のなかには「続伊豆の踊子」を書くために、回想を新鮮ならしめるよすがに南伊豆行を企てたことがしるされており、「伊豆の踊子」は湯ケ島温泉で書かれた青春の回想「湯ケ島での思ひ出」をもとにして湯ケ島温泉で書かれ、その舞台は、湯ケ島温泉から天城越えであり、湯ケ野温泉に下つて下田への道、そして下田港なのである。このことを思へば、この「第一景色がちっとも書けていない。」という自省は同じく「湯ケ島での思ひ出」から成立した次の「少年」中の文と共に注目しなければならない。即ち「少年」の七に

温泉場から、温泉場へ流して歩く旅芸人は年と共に減つてゆくやうだ。私の湯ケ島の思ひ出は、この旅芸人で始まる。初めての伊豆の旅は、美しい踊子が彗星で修善寺から下田までの風物がその尾のやうに私の記憶に光り流れてゐる。一高の二年に進んだばかりの秋半ばで、上京してから初めての旅らしい旅であつた。修善寺に一夜泊つて、下田街道を湯ケ島に歩く途中、湯川橋を過ぎたあたりで、三人の娘旅芸人に行き遇つた。修善寺に行くのである。太鼓をさげた踊り子が遠くから目立つてゐた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が身についたと思つた。」

とあるものや八に

ここの朝は先づ西の山々が日光の明るい色の頭巾を冠る。頭巾の縁が山腹を辷つて広がり、日が高くなる。夕は東の山々が頭巾を冠る。湯ケ島の山が頭巾を脱いでからも天城の峰はまだ脱がない。そこだけに黄色く日光の残つてゐる天城を南に仰ぐと私は必ず踊り子を思ひ出す。

とあり又十四には

私は高等学校の寮生活が、一二年の間はひどく嫌だつた。中学五年の時の寄宿舎と勝手がちがつたからである。そして、私の幼年時代が残した精神の病患ばかりが気になつて、自分を憐れむ念と自分を厭ふ念とに堪へられなかつた。それで伊豆へ行つた。旅情と、また大阪平野の田舎しか知らない私に、伊豆の田舎の風光とが私の心

をゆるめた。そして踊子に会つた。いはゆる旅芸人根性などとは似もつかない、野の匂ひがある正直な好意を私は見せられた。いい人だと、踊子が云つて、兄嫁が肯つた一言が、私の心にぽたりと清々しく落ちかかつた。いい人かと思つた。さうだ、いい人だと自分に答へた。平俗な意味での、いい人といふ言葉が、私には明りであつた。湯ケ野から下田まで、自分でもいい人として道づれになれたと思ふ。さうなれたことがうれしかつた。下田の宿の窓敷居でも、汽船の中でも、いい人と踊子に言はれた満足と、いい人といつた踊子に対する好感とで、こころよい涙を流したのである。今から思へば、夢のやうである。幼いことである。

とある。これ等に云ふ所を総合すれば、伊豆の風物が「伊豆の踊子」創作動機として大きく働いてゐることは否めぬであらう。しかし、それにも不拘、「第一景色がちつとも書けていない」のである。これは「自然描写につとめようとも思わぬほどになにげなく書いたと云えば云える」のでもあらうが、何よりもこの作品が写生でなくて全篇回想であることにもよるだらうし又前述の如く、伊豆の現実の風景から疎隔することによつて現実的な姿を没して一種の心象風景に純化されてゐることを意味するものでもあらう。それであるからしてこそ具象に執することを排し、抽象された美と心理の世界に遊ぶ川端の作風の基本構造をあらはしてゐるのである。故に彗星の尾のやうに記憶に光り流れてゐて、しかも「第一景色がちつとも書けてゐない」「伊豆の踊子」の自然描写をここに具体的にとり上げようといふのである。

三

道がつづら折りになつて、いよいよ天城峠に近づいたと思ふ頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追つて来た。

重なり合つた山々や原生林や深い渓谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでゐるのだつた。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。

これは云ふまでもなく「伊豆の踊子」の有名な書き出しであつて、よく新感覚派的文体の例にとり上げられる部分である。直線で空際を截る天城の自然林の美しい描写である。その杉の密林を白く染めながらすさまじい早さで麓から私を追ひ上げてくる雨脚の描写は晴雨所定めず時々刻々変化してやまない天城の自然を描き上げてまこと絶妙である。この自然描写は「一つの期待に胸をときめかして道を急いでゐる」二十歳の私「折れ曲つた急な坂道を駈け登る」私の描写に続くのである。勿論すさまじい早さの雨脚遂には大粒の雨に追はれるから「駈け登る」ことになるのであるが。杉の密林を白く染めて麓から頂上へすさまじい早さで通り過ぎる雨脚のこの風景は、一つの期待に胸ときめかして道を急ぐ私の動作の原因となりしかも同位相で対応しはしないか。又そういふ風に期待に胸をときめかし起伏させてゐる私の心情も亦この自然描写が非常に密着して対応してゐはせぬかといふやうにみられないか。即ち私の行為—仮に事件といえば—事件と私の心情はそれに先行する見事な自然描写が象徴的に表現しきつてはゐないか、いふなれば、自然によつてひき起され、それに続くその場の私の心情・事件を自然として描けば、例へばここでは、杉の密林を白く染めながらすさまじい早さで私を追ふ天城の雨の光景となるであらうといふのである。いや黒々と底知れぬ暗さをもちとめどなく広がる杉の密林を、しつとり潤ほし清々と洗上げ麓から白く染め上げてゆく雨脚の早さは、いぢけて小さな殻に閉ぢ籠つたかたくななゆがんだ暗い孤児根性が、野の匂ひのある踊子等の正直な好意によつて清々しく清められ流れ落ちてゆくこの小説全編の構成を象徴してゐるといふのは言ひすぎであらうか。次には「間もなく雪に染まる」だらう所の雨宿り

の茶店の場面である。

平常用はないらしく戸障子がなかつた。下を覗くと美しい谷が目の届かない程深かつた。私は肌に粟粒を拵へ、かちかちと歯を鳴らして身顫ひした。

といふ所、これはむつとする強い火気の炉端に到底生物と思へない山の怪奇そのままの全身蒼ぶくれの爺さん、それは動けないままに、諸国から取り寄せた薬の袋の反故と手紙に埋もれ、旅人から新聞から教へられる限りの養生法や療法を必死に試みた結果としてそれを眺めながら暮してゐるのである。この生と死のぎりぎりの象徴・死の恐怖の底流暗示の爺さんに、間もなく雪に染まり人跡絶えるだらう峠にふみ止つて介抱してあかない婆さんの親切に誘はれて私は出会ひ、しばらく棒立ちになるといふ場面に続くのである。この小説にも孤児といふことを通して死の暗々とした痛切さ、それはあの「山の音」にもふと聞かれる山の音に象徴して聴かれるもので「山の音」全編の底流をなすものであらうが、そういふものの片鱗が既に「伊豆の踊子」にも見られるとすれば、この場面、山の怪奇を眺めたまま、棒立ちになる私はこれを表現して余す所がないと共に、美しいが目の届かない程深い谷といふ自然描写の点出は之と対応するものであらう。そして次に「雨脚が細く●なつて峠が明るんで来る」と私の五十銭銀貨一枚に感謝感激してどこまでも送つて来る婆さんに「涙がこぼれさうに感じ」ながら「どうも有難う。お爺さんが一人だから帰つて上げて下さい」と私が言つて婆さんと分れる場面である。ここも事件と私の心情との変転推移が、峰が明るみ雨脚が細くなる自然描写に先行され象徴されてゐるのである。そして甚だしい軽蔑を含んだ婆さんの「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだつて泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますか。」といふ言葉に煽り立てられた私の「今夜は私の部屋に泊らせるのだ」というじめつぽい獣性に汚れた私の心がやがて踊子等一行とぢかに交渉することにより晴々と洗い浄められて行くことを予告するかの如き自然描写

暗いトンネルに入ると、冷たい雫がぽたぽた落ちてゐた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでゐた。

に続いて一を終るのである。二の書き出しは、

トンネルの出口から白塗りの棚に片側を縫はれた峠道が稲妻のやうに流れてゐた。この模型のやうな展望の裾の方に芸人達の姿が見えた。

これも新感覚派的文章としてとり上げられる所であるがこの描写は一の書き出して比べて如何に明るく「展望的」であることか。そして展望の裾の方に芸人達の姿は眺められるのである。すさまじい早さで麓から私を追ひ上げてきて杉の密林を白く染めて通り過ぎる雨脚の描写と比較して、一方はすさまじく動き一方は如何に明るく展望的であることか。ここで私は「いい塩梅に晴れました」の言葉と共にいい塩梅に芸人達と道連れになることが出来るのである。一行の様子が私に分つてくるに従ひ大島の人と聞いて一層詩を感じて踊子の美しい髪を眺めたり、踊子のどきまぎした「冬でも泳げる」の言葉と、赤くなり非常に真面目になる顔と四十女の「馬鹿だ。この子は。」といふ笑にあつて私は、踊子のほのぼのとした心を暖く感じとるのである。ここの所もやはり又先行する自然描写がその情調を予告してゐるやうで正に温かく展望的である。続いて

湯ケ野までは河津川の渓谷に沿つて三里余りの下りだつた。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すつかり親しくなつた。荻乗(おぎのり)や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ケ野の藁屋根が麓に見えるやうになつた頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思ひ切つて言つた。彼は大変喜ん

だ。

溪流に沿つて下る、山や空まで南国らしく明るい、藁屋根もおだやかな山村風景である。ここでは私は男と絶えず話し続けてすつかり親しくなり、湯ケ野の木賃宿についた時に、「旅は道連れ、世は情。私たちのやうなつまらない者でも、御退屈しのぎにはなりますよ。まあ上つてお休みなさいまし。」と四十女の私にすすめる声に娘達は一時に私を見たが、至極なんでもないといふ顔で黙つて、少し羞かしさうに私を眺めてゐたことや、宿屋の二階で、踊子が私の前で真赤になつてはにかみ手を顔はせて茶碗を茶托から落としかかつたり、四十女が「まあ！厭らしい。この子は色気づいたんだよ。あれあれ……。」と呆れたり、一方私は峠の婆さんに煽られた空想がぽきんと折れるのを感じたり。四十女は国に残してある子供の着物が私と同じだと語つたり。私が別の宿に案内されてからはそこの内湯で男が身の上話をしたりする。そして二階と庭でやりとりする包金が藁屋根の上に落ちる所に至るのである。いふなれば私と旅芸人一行との間に展開される種々なごく日常的な些細な事柄を通じて私と芸人等は心から近づくと共に芸人の一人一人が私にはそのかすかに起伏する心と共に次から次へと眺められ分つてゆく過程が描かれてゐるのである。ここでは、ごくなだらかな様々な平穏な事件と、さりげなき日常的な起伏をみせる私の心情がある。正に山や空まで明るい南伊豆の溪間を下る山村藁屋根風景の情調である。その風景のうつり変る動きである。風景中の一点景人物化する私である。

夕暮からひどい雨になつた。山々の姿が遠近を失つて白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁つて音を高めた。こんな雨では踊子達が流して来ることもあるまいと思ひながら、私はじつと坐つてゐられないので二度も三度も湯にはいつてみたりしてゐた。部屋は薄暗かつた。隣室との間の襖を四角く切り抜いたところに鴨居から電燈が下つてゐて、一つの明りが二室兼用になつてゐるのだつた。

とんとんとん、激しい雨の音の遠くに太鼓の響きが微かに生れた。私は掻き破るやうに雨戸を明けて体を乗り出した。太鼓の音が近づいて来るやうだ。雨風が私の頭を叩いた。

昼間と全く打つて変つた烈しい急激に荒れる自然の描写である。しかも私のゐる部屋は薄暗く電燈は二間に一つ兼用で、ひどい雨、遠近を失つて白く染まる山々、黄色く濁り音高く流れる激流、激しい雨の音、烈しい天候の転変である。ここに描かれるものは「こんな雨では流して来ることもあるまい」と思ひながらも、なほかつ踊子を強く期待して、じつと坐つてゐられないで二度も三度も湯にはいつてみたりする呆れたあはただしい私の行為と焦躁の心情である。それは微かな太鼓の響に打ちつける雨音の激しい雨戸を掻き破るやうに開いて、体を乗り出し頭を雨風に叩かれる気狂じみた烈しい私の行為と衝動的な心情である。次いで三味線の音によつて分つてくることは料理屋のお座敷に呼ばれてゐるらしい芸人等と酒の入つた三四人の男の声であり、そこがすめばこちらに流してくるだらうといふ私の期待を見事に裏切つて馬鹿騒ぎになつて行く酒宴であり、稲妻のやうに闇を鋭く通る女の金切声、乱れた足音、そしてそれがぴたと静まり返つてしまふのである。芸人等が外に出た様子もない。太鼓の音が聞える度に「太鼓を坐つて踊子は打つてゐるのだ」とほうと明るんでゐた胸も、もはや静まりやうもない。私は「踊子の今夜が汚れるのであらうか」と悩ましく、たまらなく、雨の音の底に沈み込まねばならぬ。雨戸を閉ぢて床にはいつても胸が苦しくてたまらぬのである。また湯にはいり、荒々しく湯を掻き廻すこととなるのである。ここの所は実に緊張しきつた場面、烈しく動揺する所であり、切迫感あふれる所である。事件と心情はここにおいて切迫と緊張の頂点、葛藤の極点に到達する。ここでも自然によつておこされる事件と心情は又自然により予告され象

徴されてゐるのであるが、逆にこれを自然描写で表現すれば、烈しく叩く雨濁流みなぎり流れる渓流といふことになる。ここでも自然描写が事件・心情に先行しその成行を予告してゐるやうである。しかもこの激しい事件と心情の描写はこの雨風の描写を描写の契機要素として取り入れつつ交互に入り混りつつ強く描かれてゐるのである。雨風は心情事件を呼び出し、それは又雨風の描写を呼び起すといふやうに、而してこの緊張切迫の所は「伊豆の踊子」前編の構成からいってもその一つのクライマックスに当つてゐることを注目しておく。そしてこの緊張の極点もやがて遂に

雨が上つて、月が出た。雨に洗はれた秋の夜が冱え冱えと明るんだ。跣で湯殿を抜け出して行つたつて、どうとも出来ないのだと思つた。

と明るく、洗はれた様に冱え冱えとした自然の描写によつて結末の、解決の明るく爽快なことを予告しながらこの波瀾の二を終るのである。この切迫と緊張は直に三において解きほぐされ結着しなければならぬ。三の書き出しは、この最後の湯殿の「ひびき」からはじまるであらう。

翌る朝の九時過ぎに、もう男が私の宿に訪ねて来た。起きたばかりの私は彼を誘つて湯に行つた。美しく晴れ渡つた南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿の下に暖かく日を受けてゐた。昨夜とは打つて変つた美しく晴れ渡つた暖い小春日和で水かさの増した小川さへ暖かい日ざしを受けて穏かである。私はそれとなく昨夜の出来事を男から窺はうとするのであるが、彼の余りにも何げない風の答に黙らざるを得ないのである。これ正に昨夜の天候も今朝は知らぬげに暖かく晴れ渡つて見せた天気の様子である。やがて彼に指されて見る川向うの共同湯の仄暗い湯殿の奥から、手拭もない真裸で踊子が飛び出して来て、脱衣場の突鼻に飛び下りさうな恰好で立ち、若桐のやうに足も伸ばし、両手も一ぱいに伸ばして、ふりそそぐ日の光の中に白い裸身をさらして、私達を見つけた喜びで何か叫んでゐるのである。私は白い裸身を眺めて心に清水を感じ、ほうと深い息を吐いてことこと笑い、朗らかな喜びでことことと笑ひ続けるのである。子供なんだ。私の頭は拭はれたやうに澄んでくるのである。踊子の髪が豊か過ぎることと、その上娘盛りのやうに装はせてあることとで、私はとんでもない思ひ違ひをしてゐたのである。ここの所何といふ見事な解決であらう、昨夜の私のやりきれぬ悩ましさはまこと夢の様に洗はれねばならぬ。いや峠の茶屋の婆さんの言葉に煽り立てられた汚れた心、一度は四十女の言葉でぽきんと折れるのを感じながらも私の心の奥に底流してゐた欲情、それは昨夜の悩ましさの底にもある—他人に許し難きものが己には許される勝手気儘なエゴともいひ得るかもしれぬがやはり踊子に傾倒してゆく私の心情であらう—それがきれいに洗ひ清められて、心に感ずるものは清水である。ここにあるものはあくまで明るく純な踊子の純粋さとそれに洗はれ清められる私の心情である。昨日の悩ましさが明るく清らかに解決されたばかりではない、天城以来いやそれ以前からの私の心のわだかまりが見事に洗ひ流されて、私自身まこと爽かに明るいのである。若桐のやうにすらりと伸びてゐるのは踊子の足のみではない私の心もさうなのである。ここにおいて二の終末の、雨が上つて、月が出た。雨に洗はれた秋の夜が冱え冱えと明るんだ。といふ自然描写の予告はまことによく果されており、美しく晴れ渡る光豊かな南伊豆の小春日和はこの事件・心情と融け合つてまことにあたたかく爽快な情調をかもし出すのである。

四

以後は省略することにするが、これまで述べてきた所でも既に明らかである如く、「伊豆の踊子」の「自然描写」は成程「山の音」や

「古都」のやうには書かれてゐない。字数にしてからが以上にとり上げた所で前編の総てであるのだからまことに僅少である。全く「景色がちつとも書けてゐない」のかも知れない。いふなればその僅かの描写も現実のものではなくて、彼の純化され、美化された心象風景であるにつきるかもしれない。しかしそれはそれとして、いやそれなるが故に前述のように一描写一描写を区切つて考へてみると、自然描写は次に起る事件や心情を必ずといつてよいぐらい予告し且つ又その事件や心情と映発し混融して一つの場面を作り上げてゐるのであり、次の事件や心情と結合して分ち難く、単なる背景や舞台とはちがいもう一歩踏み込んでゐるのである。自然・事件・心情分ち難く混融して共々に一つの情調を作りあげる素因となつてゐるのであるが、ただ自然描写がこれに先行してこれを予告するのである。又全体の構成においても個々の自然描写そのものも事件や心情と共に緩急よくその所を得て序破急ともいふべき劇的な構成がとられてゐるといつても差支へないのではなからうか。之を要するに「伊豆の踊子」全編を通して見ても自然描写は事件や心情と分ち難く結びついて、或は事件や心情に先行して次の場面を予告すると共にやはりその場面の情調作りに重要な契機として事件や心情の中にも入り込むことあだかも萬葉の歌、例へば、(註六)秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋止まむ、の序詞秋の田の穂のへにきらふ朝霞が下の句わが恋の情緒を予告しつつ、いづへの方にわが恋やまむという句の心情と結びつきつつ、歌全体に一種独特の情調をかもし出してゐるのと同巧異曲といへば言ひ過ぎになるであらうか。

(註)一　解釈と鑑賞昭和三十二年二月号
(註)二　解釈と鑑賞昭和三十二年二月号
(註)三　川端康成論考一七三頁
(註)四　川端康成論考一七四頁
(註)五　以下ほぼ同様の趣旨を川端康成論考にも述べてある。川端康成論考一五九頁・一六〇頁
(註)六　萬葉集巻一88 譽姫皇后思天皇御作歌